

タイトル	異文化接触と姉妹都市交流
著者	井上, 真蔵; INOUE, Shinzo
引用	北海学園大学人文論集(60): 19-67
発行日	2016-03-31

# 異文化接触と姉妹都市交流<sup>1</sup>

井上真蔵

## はじめに

平日の午後にも関わらず、最終講義のために足をお運びくださり、お礼申し上げます。本日は、「異文化接触と姉妹都市交流」というテーマでお話させていただきたいと思います。

まず最初に、姉妹都市の概要について簡単にご紹介いたします。姉妹都市は、第2次世界大戦後、アメリカのアイゼンハワー大統領により、市民同士の交流により親善と友好を深め平和に寄与しようという趣旨で始められました<sup>2</sup>。日本とアメリカとの間の第1番目の姉妹都市提携が、長崎市とアメリカのミネソタ州のセント・ポールとの間で結ばれました。日本が戦後復興をしようとしている1955年のことです。そして、現在では日本国内で姉妹提携をしている自治体の数は1,678件に達しています<sup>3</sup>。もっとも、この数値には複数の都市と姉妹提携をしているケースも含まれますので、自治体の総数はこれよりも少なくなっています。

さて、今日お話するのは、そのような姉妹都市のなかでも、日本とカナダの間の姉妹都市交流についてです。カナダとの姉妹都市提携の第1番目は、大阪の守口市とブリティッシュ・コロンビア州のニューウェストミンス

---

<sup>1</sup> 本稿は、2015年2月5日に行われた最終講義に加筆修正したものである。

<sup>2</sup> Sister Cities International, *Peace Through People*, Butler Books, Louisville, KY, 2006, p.5.

<sup>3</sup> 自治体国際化協会のホームページに記載された数値（2015年5月31日現在）。<http://www.clair.or.jp/j/exchange/shimai/index.html>

ターによるもので、1963年のことでした。現在カナダとの姉妹都市数は、73件にのぼっています<sup>4</sup>。そして、北海道について言えば、北海道内の26の自治体が姉妹提携を結んでおり、カナダとは非常に縁が深いのが分かります。これらの73の自治体のうち、調査で訪れたのはカナダ側の15の自治体と日本国内の45の自治体です。それらの自治体で、姉妹都市交流に関わっている職員の方々や実際に訪問団に参加したり、ホストファミリーとして受入れに関わってこられた方々から、お話を伺うことができました。

それでは姉妹都市交流というのは、どのようなもののでしょうか。国境を越えて、文化を越えての交流はさまざまな形がありますが、姉妹都市交流の特徴を簡単に押さえておきたいと思います。姉妹都市交流とは、異なる国々の市民同士が、親善と友好を基礎にして交流を深めていき、お互いの文化的な違いを理解して相互理解を深めていこうというものです。これとは対照的なのがビジネスにおける交流ですが、ビジネスは利益追及が主な目的であり、そこでは往々にして相互の利害関係が異なっており、親善と友好を基礎とする姉妹都市交流とは基本的に異なったものだと言えるで

---

<sup>4</sup> 日本とカナダとの姉妹都市提携数について、カナダ大使館のホームページでは76件([http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/bilateral\\_relations\\_bilaterales/sistercity-jumelage.aspx?lang=jpn](http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/bilateral_relations_bilaterales/sistercity-jumelage.aspx?lang=jpn))、自治体国際化協会のホームページでは70件となっており、6件の違いがある。この6件のうち、上士幌町とスレイブレイクについてはそもそも提携自体が存在しておらず、加賀市とハミルトンおよび大子町とギボンズについては提携が解消されているが、これら3件はカナダ大使館のHPに記載されたままである。残りの3件のうち、本巢市とデボン、志賀町とコールウッド、石井町とミネドーサについては、いずれも交流は途絶えたままだが、姉妹都市協定は解消されていないとのことであり、この3件もカナダ大使館のホームページには残ったままである。ところが、自治体国際化協会の場合には、地域の国際交流関係部署からの報告に基づいて集計しているので、実質的に交流のないこの3件については記載されていない。従って、総計が70件となっているのである。実質的な交流の有無は別にして、姉妹都市盟約書が存在しているか否かということを基準にすれば、姉妹都市提携数は73件である。

しょう。ちかごろでは、「姉妹都市はどのような経済的メリットがあるのか」などの質問もよく見かけられます<sup>5</sup>。しかし、上に述べた根本的な違いを理解すれば、このような問いかけは姉妹都市交流には馴染まないということが理解されると思います。

このような姉妹都市交流という現象を、異文化接触の視点から理解していこうというのが、今回のテーマになります。極めて簡単に言うと、異文化接触とは自分とは異なる文化に出会った時に、「当たり前が当たり前でなくなる」ということです。このような時に、「相互理解」とか「郷に入っては郷に従え」とかいう表現がよく使われます。英語の表現にも、同じように、“When in Rome, do as the Romans do.” という諺があります。しかし、「言うは易しく行うは難し」で、実際に異文化に出会ったときには、そんな風にはいかない場合が多いんですね。つまり、お互いに「自分たちとは異なるプログラム」に基づいて行動しており、しかも両者ともに「その事実」に気づいていないことが多いからです。そのような難しさはありますが、異文化接触の醍醐味というのは、そのような過程を経験することにより、「自分自身が変わる」ということを自らが認識することだと思っています。そして、その過程でそれまでは想像もしないような影響を受けるということでもあるのです。

## I カナディアン・ウェイとの出会い——行動的なカナダ人

それでは、具体的に見ていきましょう。ここではカナダ人の考え方や行動の仕方を「カナディアン・ウェイ」と呼ぶことにいたします。このカナ

---

<sup>5</sup> 石井良一(編)「NRI パブリックマネジメントレビュー」2006年11月 Vol. 40, 野村総研 (<http://www.nri.co.jp/opinion/region/2006/pdf/ck20061101.pdf>)。楠本利夫「姉妹都市交流の意義——グローバル化の進展と姉妹都市——」『国際文化研修 2013 夏』vol.80, (<http://www.jiam.jp/journal/pdf/v80/tabunka01.pdf>), 40 ページ。

ディアン・ウェイとの出会いは、日本側からカナダを訪問したときだけではなく、カナダ側から日本を訪れた時にも起こります。お互いに自分たちが見慣れない所に目がいく訳ですが、日本人にとってどのような側面に目がいくのでしょうか。日本国内で「デッカイドー」と言っている広い北海道から行っても、カナダの自然を目の前にすると、「カメラに入りきらない」とか「北海道の自然の10倍だ」とか言って驚きの声をあげます。ここでは、このようにすぐに目に入ってくる自然とか街並ではなく、もう少し踏み込んでカナダ人の行動様式という側面を取り上げていくことにしましょう。

### 1 やりたい事をやっても良いんだ！——「クロッガーズ」との出会い

東京の板橋区はオンタリオ州のバーリントンという町と姉妹提携をしています。この町はナイアガラに行く途中にあります。そのバーリントンから市民訪問団がやってきた時のことです。訪問団の中には、「クロッガーズ」というシニアのダンスグループがいて、板橋区の区民ホールでダンスの披露をしました。さて、どうでしょうか。写真に写っているように、10人余のグループですが、年配の男性が一人と若い女性も一人います。しかし、ほとんどが60歳前後の女性で、70歳代の方もいらっしゃいます。そし



て、この赤い短いスカートに、この衣装はどうでしょうか<sup>6</sup>。これを見た板橋区の同年輩の女性は、驚くんですね。「カワイイ〜！」とか「あんな衣装をきて踊っても良いんだ！」と言うんですね<sup>7</sup>。

板橋区というと、東京 23 区の一つですし池袋も近いですしね、私は勝手に都会的で進歩的だと思っていたのですが、やはり日本人だと再認識いたしました。東京という大都市に住んでいようが、日本人の年配の方の基準は「年相応に」という考え方が非常に強いわけです。そのような見方が当たり前の方々からすれば、目の前に広がるクロッガーズのダンスは全く想像もしなかった世界との出会いなんですね。こんな風に日本では当たり前だと思っていたことが、カナダのシニアのダンスを目の当たりにすることによって、「別なやり方」があるんだという認識をするわけですが、これは一種のカルチャーショックと言っても良いと思います。

## 2 議員がプレスリーの真似

冒頭でも触れましたが、大阪の守口市はブリティッシュ・コロンビア州のニューウェストミンスターと姉妹提携をしています。その町から守口市へ訪問団がやってきて、ホテルで歓迎パーティが行われた時のことです。訪問団の中に市議員の方がいたのですが、パーティの途中で何も言わずにゴソゴソと隅の方で仮装をしてるんです。その方は歌が好きで、何とエルビス・プレスリーの衣装に着替えて歌うんですね。そして、歌い終わったら、みんなにお菓子を配って回るんです。その時の様子を思い出しながら、担当者の方は日本人との違いを次のように話してくれました。

そんなことは、わたしら想像もできないですよ。表敬訪問の時なんかもうそうですが、日本人はガチガチになるでしょ。ところがカナダの方

---

<sup>6</sup> 写真は、板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページより。[http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c\\_kurashi/005/005741.html](http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/005/005741.html)

<sup>7</sup> 板橋区役所政策経営部国際交流課での聴き取り調査：2002年11月10日。

は、きっちりと進行表作って、はい、次こうですよって言うといてもね、向こうさんは「フゥ～ん」ちゅう感じでね。それでフランクに言いたいこと言うし、喋るし、非常に和みますね<sup>8</sup>。

ほんとうに、この担当者の方も言っているように、日本の「当たり前」からすれば想像もできないことではないでしょうか。普通、日本でこんな事は起こらないでしょう。身内だけの集まりならいざ知らず、このような公式の歓迎会の席上では議員さんは「議員さんらしく」しているのが、日本人にとっては当たり前のことではないでしょうか。そして公式行事は進行表にしたがって支障無く終えるのが、関係者にとっては最重要課題です。おまけに、日本では議員さんとか市長さんになると威厳があって、一般市民とは距離がある感じで、議員さん自身が飛び入りで余興を行うことは考えられませんから、余計にビックリ仰天となるのでしょうかね。しかし、この担当の方が臨機応変に対処されたそうですし、大阪という土地柄のせいもあってか、大いに受けたとのことでした。

### 3 手作りの「日の丸の旗」で歓迎

次に取りあげるのは、北海道の陸別町からアルバータ州のラコームという町に、訪問団が訪れた時の話です。ある朝、ポテト農場に訪問団が見学に行きました。そして、どうでしょうか、写真に写っているのは、かなり大きな日の丸の旗ですね<sup>9</sup>。家の屋根と比べると、かなりの大きさだということが分かります。これだけの大きさであれば、かなり遠くからでも「アッ、日の丸の旗じゃない？」と、分かりますね。それで、そこのご夫妻と話をし、またビックリです。何と、奥さんが朝早くから、日の丸の旗を手作

---

<sup>8</sup> 財団法人守口国際交流協会での聴き取り調査：2005年9月22日。

<sup>9</sup> プリンズポテト農場、『絆 8000 キロを越えて——昭和61年度町民海外研修報告書、陸別町・ラコーム町姉妹都市提携の概要』陸別町役場、1986年、24ページ。



りしてくれたとのことなんですね。これで、「もう、ほんとうに歓迎の気持ちが伝わってきました」と、訪問団の方々が感激したのは言うまでもありません<sup>10</sup>。どうでしょうか、われわれ日本人は、なかなかこのような歓迎方式は思いつかないのではないのでしょうか。また、思いついたとしても、こんな風に「思っていることを形にして表す」というところまで行かないのではないのでしょうか。歓迎の気持ちは同じであっても、その表し方には大きな違いがあるようです。「思いを形にする」、あるいは「思いを行動で表す」という方式が、カナディアン・ウェイの特徴の一つだと言えます。

#### 4 ポートで歓迎会へ

この「ポートで歓迎会へ」ということも、ほんとうに日本からの訪問団

---

<sup>10</sup> 同上。



を驚かせたことなんですね。これは、名寄市の訪問団がオンタリオ州のリンゼイに行ったときのことです。カナダでは歓迎パーティなんかを屋外で行うことも多いのですが、この時も湖の畔で開いてくれたんですね。湖の畔が会場となった訳ですが、何と、そこへボートに乗ってやってきたカナダの方がいたんです。一人でボートに乗ってやってくるということ自体驚きなのですが、何と、この方はオンタリオ州政府の環境大臣をされてたんですね<sup>11</sup>。日本では、どうでしょうか。要職にある方が、このように単独で、しかもボートを操縦してやってくるということは、考えられないですよ。後にリンゼイに調査に行った時に、この方にもお会いして、「名寄の方々はどう驚いていましたよ」と述べると、「いやー、あの時はエンジンが途中で動かなくなってね～」と、気さくに話してくれました<sup>12</sup>。こういうことから、非常に行動的なカナダ人の側面を見ることができると思います。

## 5 朝食前の空の散歩

少し前に陸別町からの訪問団について触れましたが、これもその訪問団の方々が経験したことです<sup>13</sup>。ある日のこと、町長さん主催の朝食会に招かれたのですが、なんと「まず朝食前に空の散歩はいかがですか？」と、空の上に舞い上がるお誘いなんですね。まさに「朝飯前」と言うのでしょうか、町長さんの操縦する小さな飛行機で、ほんとうに飛び上がったんです。まさか、こんなことが起こるとは、夢にも思わなかったことでしょうね。その町は、アルバータ州の小さな田舎町ですが、飛行機クラブがあるんです。カナダでは飛行機を趣味とする人も多いですし、冬になると北の方に飛行機に乗ってハンティングに行く人も珍しくはありません。そのような事情からすれば、それほど驚くことではないのかもしれませんが、日本ではとても考えられないことです。そして、この町長さんは、何と役場に通うのも

---

<sup>11</sup> 名寄市役所での聴き取り調査：1987年12月2日。

<sup>12</sup> リンゼイ市役所での聴き取り調査：1994年8月16日。

<sup>13</sup> 鹿追町『第2回鹿追町北方圏視察研修報告書』1984年、64-65ページ。



バイクに乗ってやってくると言っていました。日本であれば、自転車で役場にくるといえることはあるでしょうが、バイクとなると危ないですから、普通は考えられないですよ。全ての町長さんが、このような方ばかりではありませんが、ほんとうに行動的なカナダ文化を象徴していると言えるでしょう。

以上のように、日本では考えられない行動的なカナダ人の側面には驚かざるをえません。このような活動的な特徴は一般のカナダ人に見ることができますし、同じようにカナダのトップの首相にも見ることができます。この写真の人は、ご存知の方も多いのではないかと思います。1970年代から1980年代にかけて、カナダの首相をつとめたピエール・エリオット・トルドーです。何と、驚きませんか。写真のように、白いメルセデス・ベントのオープンカーに乗って首相官邸を行き来していたんですね<sup>14</sup>。写真では見えにくいですが、上着の左襟の黒く見えるのは「赤いバラの花」なんです。造花ではなくて、本物のバラの花なんですね。そして、こんな風に毎日バラの切り花を刺していましたね。バイクに乗った写真もあります

---

<sup>14</sup> トルドー首相とメルセデス, <http://www.fredchartrand.com/Editorial/Trudeau/i-4dBVvvT>



が、若い時にはカナダの東から西にかけてバイクで横断したこともあるそうです<sup>15</sup>。最後の写真は、若い奥さんと一緒のところですか。こんなラフな格好は、とても日本の首相はできないですね<sup>16</sup>。それに当時結婚した相手は、何と30歳も年下で、随分と年の差があって、結局、離婚することになりま

---

<sup>15</sup> バイクに乗ったトルドー首相。 <http://www.ctvnews.ca/historians-weigh-trudeau-s-legacy-decade-after-death-1.556809>

<sup>16</sup> トルドー首相夫妻。 <http://sharpmagazine.com/style/pierre-trudeau-the-sharp-man-of-style/>

した。カナダという国をコントロールできたのに、若い奥さんはコントロールできなかつたとか、あの結婚がトルドーが行った唯一の「間違った決定」だとか言われたものです。

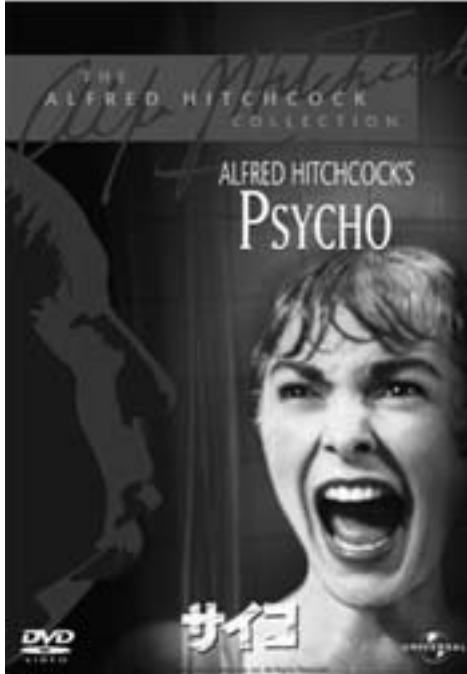
このように「行動するカナダ人」と出会うことは、「自ら自制する日本人の行動」を認識させることになります。そして同時に、今までになかった行動の仕方を受入れ、自らの行動にも影響を与えることになるのではないのでしょうか。

## II ジャパニーズ・ウェイが通じない

カナダ人の考え方や行動の仕方を「カナディアン・ウェイ」と呼びましたが、同様に日本人の考え方や行動の仕方を「ジャパニーズ・ウェイ」と呼ぶことにいたします。この日本人に馴染みのある考え方や行動は、日本文化という環境の中では、その存在にすら気づくことなく支障なくコミュニケーションを行うことができます。しかし、この日本的行動の仕方は異なる文化に出会う時に、通じないどころか、最悪の場合には対立したまま別れることも起こりえるのです。まずは、非常に極端なケースですが、このジャパニーズ・ウェイが悲劇に至ったケースを見ていきましょう。

### 1 「言わなくても分かる」の悲劇

東京から電車で1時間あまりのところにある町での出来事です。彩子(さいこ)さんは当時は短大生でしたが、高校の時にカナダの姉妹都市でホームステイしたことがあります。そんなこともあり、彩子さんの家は旅館をされていて夏の間は忙しいにも関わらず、カナダから二人の男子高校生を迎えることになりました。彩子さんは真面目な性格のようで、カナダ人の高校生たちに日本のことを知ってもらいたいと思い、神社やお寺などに案内をしたのです。ところが、二人の男子高校生は全然興味を示さないのですね。彼らが興味をもったのは、ゲームセンターやゲームソフトなのです。彩子さんは、ガッカリです。しかし、もっと大きな問題があったのです。この



男子高校生の二人は、初めて出会った時から、なぜか“Saiko is crazy. Saiko is crazy.”と繰り返して言っていたのです<sup>17</sup>。彩子さんは、“crazy”と言われても、何のことだか分かりませんでした。気になって調べてみると、何と言うことでしょうか。ヒッチコックの映画『Psycho (サイコ)』<sup>18</sup>にでてくる「サイコ」なのです。この映画では、亡きアンソニー・パーキンスが見事な「気違い」役をやりましたが、製作が1960年ですから、ヒッチコックのファンでもないかぎり分かりませんよね。二人の高校生もこの映画については知らなかったかも知れませんが、“psycho”という言葉は“psychopath (気違い)”という意味で日常生活でも使われますから、聞いた途端にその言葉が頭に浮かんだんでしょうね。

---

<sup>17</sup> 箱根町役場での聴き取り調査：2003年3月4日。

<sup>18</sup> 写真は、ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン、2004年7月7日より。

さて彩子さんは、どうしたと思いますか？ 散々考えた挙げ句、役場の担当者に英語で手紙を書いて今までの経緯を訴えたのです。英語の手紙を見せてもらいましたが、ほんとうに悔しさが現れていました。そんな手紙を渡された担当者も、びっくりしましたが、二人の高校生に見せる以外にありませんでした。この手紙を見た高校生たちも、いきなりのことで、ビックリ仰天です。なぜ、こんな手紙を手渡されたのか、その理由が分からないまま、とにかく“*I'm very very sorry.*”と繰り返す以外にありませんでした<sup>19</sup>。高校生たちは、彩子さんが何も言わず、何も態度で示さなかったの、まったく“*No problem.*”と思っていた訳です。

こうして、彩子さんも高校生も役場の担当者も、なぜこのような事が起こったのかという理由も分からないまま別れるという事態にいたりしました。さて、みなさま方が彩子さんの立場であれば、どのようにしたでしょうか。彩子さんは、英語の手紙を書こうと決心するまで、高校生にたいして「嫌だ」とか「止めて」とかの言葉を発したこともなく、その気持ちを態度で示したこともありませんでした。ただ辛抱をして、耐えて耐えて、最後には爆発してしまいます。日本語でも良いし、“*I don't like your joke.*”とか“*Your joke is not funny.*”とか、とにかく分かった時点での意思表示が必要でした。しかし、まことに「言うは易し行うは難し」そのものです。彩子さんに限らず、日本人にとっては、この「No」という簡単な意思表示、これがほんとうに難しいことなのです。それも、最初のうちに言えれば良いのですが、三度目、四度目となってくると非常に言い難くなってきます。また、もう少し違った言い方ができたかも知れません。「サイコという名前は *crazy* という意味ではないのよ。日本語では、*beautiful colors* という意味なの。」と教えてあげることもできたかも知れません。さらに、「日本語で『サイコー』というと、最高=*best* という意味もあるの」と言うと、高校生たちは、“*Saiko is the best.*”と言うようになっていたのでは

---

<sup>19</sup> 箱根町役場での聴き取り調査、前掲。

ないでしょうか。もっとも、このように言えるようになるには、常日頃から日本語であっても「心にあること」を「言葉にする」という訓練と心掛けが必要なのかも知れません。

## 2 言葉で言えない

上のケースのように、耐えて耐えて最後に爆発するという例は、多少極端かも知れませんが、それほどではなくても「言葉で言えない」ために、「思うようにならない」ということは、しばしば見られます。そのような、いくつかの例を見てみましょう。

### (1) シャワーが浴びれない

自治体の交流に小学生が派遣されるというのは珍しいのですが、東京の江東区にある大島第3小学校は、そのような数少ない例の一つです。ここから派遣された小学生が、2～3日のホームステイなのですが、シャワーの使い方が分からなくて、シャワーを浴びずに帰ってきたということを、担当の先生が話してくれました<sup>20</sup>。

これは何も小学生だけではなくて、大人の人の場合にも同じようなことが起こるんですね。例えば、北海道のある自治体から姉妹都市を訪問して、随員の職員の方がホームステイをしたときのことです。「お湯がチョロチョロとしか出ない。われわれの感覚では、ひねればお湯がでるし水もでる訳で、こんなんでお客に風呂に入れというのかと思って、入らずに帰ってきましたよ」と、その時の模様を話してくれました<sup>21</sup>。

どうでしょうか、お聞きの皆さん方は、シャワーや風呂のお湯をだすのが、それほど難しいのかとお思いになっていることと思います。実は、私事で恐縮ですが、去年の3月に家内とロサンゼルスに行った時のことなんです。家内がシャワーを浴びようとしても、水もお湯もチョロチョロとしかでてこない。それで、私が見ると、なるほど日本の蛇口とは違うんです

---

<sup>20</sup> 江東区立第三大島小学校での聴き取り調査：2002年12月10日。

<sup>21</sup> 鹿追町での聴き取り調査：1987年12月2日。



が、そうですね、2〜3分あれこれやってみて、そうしたら出たんです。確かに、日本の場合のように、ひねって水やお湯がでてくるという単純なものではないのですね。これも、文化の違いと言えば、文化の違いですね。さて、それでどうなっているのかと言うと、写真をご覧ください<sup>22</sup>。この丸い所にレバーのついた所しか写っていませんが、この上の方にシャワーヘッドがあります。さて問題は、この丸い所なんです。赤と青はお湯と水ですから、お湯は左に水は右にレバーを回せば良いんですね。ところがレバーを握って、押ししても引いても、お湯も水もチョロチョロしかでないんです。写真では分かり難いと思いますが、問題はこのレバーがついている土台の丸い部分なんです。ここを両手で持って手前に引っばるんですね。これで無事シャワーを浴びれたのです。さて、その次の日の朝、食堂で朝食をとっていると、日本語で話している若い女性が二人いるんですね。そこで、「日本の方ですか」と話して、「シャワーは、うまく出ましたか」と尋ねると、やはり「分からなかったのでフロントに尋ねました」

---

<sup>22</sup> ロサンゼルスのホテルにて。



と言うことです。話を続けていますと、何と一人の方は18歳でアメリカの高校の寄宿舎に入って、以来20年余アメリカに住んでいるとのこと。もうアメリカ人と言っても良いですね。それでも、ホテルのシャワーを浴びるのにフロントに尋ねなければならないという訳ですから、日本から初めて行ってシャワーの出し方が分からなくても、無理はありませんね。ちなみに、私の家内も、高校の時にウィスコンシンに1年間留学しており、私と一緒に7年間トロントに住んでいたことがあるので、何とか日常生活は過ごせるのですが、シャワーがうまく浴びれなかったという訳です。

少々話しが長くなりましたが、ここから言えることは、極めて単純です。要するに、分からないことは尋ねると言うことなんです。ところが、この尋ねると言うこと、これが日本人にはなかなかできないのではないのでしょうか。と言うのも、「みんな知っていること」を尋ねるのは恥ずかしいという心理的抑制が働いているためだと思います。例えば、日本の教室では皆さん方もよくご存知のように、質問がでてこないのが普通ですね。これは教室だけではなくて、一般の世間でも同じなんです。例えば、本屋さんに並ぶ本にも、このような日本人の気持ちをつかむタイトルがつけられているんですね。『今さら聞けないパソコンの常識』<sup>23</sup>とか『いまさら聞けない料理の基本』<sup>24</sup>とか、『今さら恥ずかしくて人に聞けない冠婚葬祭マナーとお金』<sup>25</sup>とか、こんな風に「恥ずかしくて今さら聞けない」というタイトルは、まさに日本人の共感をよぶものですから、つい買ってみようという気持ちにさせるんじゃないでしょうか。

## (2) 食事の量が多いんだけど……

カナダでの朝食は、割と簡単な場合が多いんですね。日本からの中学生たちは、想像していた朝食とは違うので、「アレッ、ワッフル2枚だけなの」

---

<sup>23</sup> 『今さら聞けないパソコンの常識』 新星出版社、2012年。

<sup>24</sup> 『いまさら聞けない料理の基本』 宝島社、2012年。

<sup>25</sup> 『今さら恥ずかしくて人に聞けない冠婚葬祭マナーとお金』 主婦と生活社、2005年。

と言ってしまふこともあるようです<sup>26</sup>。ところが、夕食となると、これはもう驚くほどの量となることが多いんです。

実際、中学生たちは、どんな風にしたのか見ていきましょう。ある男子生徒は、こんな風に言っています。

カナダの家庭にまじって生活して、一番日本との違いを感じたのはやっぱり料理だった。ボリュームがありすぎるほどのすごさで、そこはやっぱりちょっと辛かった。でも私を楽しませようとたくさん頑張ってくれた<sup>27</sup>。

一人前の皿に盛られている量が多すぎるんですね。日本人が食べる2倍から3倍の量でしょうね。大皿に盛られて各自が取って食べる場合には好きなだけ取れば良いのですが、それでもカナダ人の基準からすれば「余りにも少ない」と写るようで、さらに勧められることになります。いずれにせよ、先ほどの生徒が「やっぱりちょっと辛かった」と言っていますが、「もうお腹がイッパイですから」とは言えずに、ついつい無理して食べてしまうことになるんです。出されたものは全部食べないと相手に悪いと思うんですね。「もう結構です」と、言葉にだして断れないんです。ですから、別の生徒も言っていますが、「胃が破裂寸前」という状態になってしまいます<sup>28</sup>。

このようなことは、何も中学生だけに限ったことではなく、大学生でも大して変らないんですね。今ここでお話しているようなことを、異文化理解論の授業で話していた時のことです。私どもの人文学部からブロック大

---

<sup>26</sup> 世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年3月、39、29ページ。

<sup>27</sup> 「姉妹都市派遣中学生報告書（3月25日-4月1日）」財団法人守口市国際交流協会、2004年、12ページ。

<sup>28</sup> 財団法人守口市国際交流協会での聴き取り調査：2005年9月21日。「姉妹都市派遣中学生報告書（3月22日-3月29日）」2001年、11ページ。

学に夏期研修にあってホームステイをしますが、参加学生から同じようなことを聞くことができました。やはり、毎日の夕食の量が多いのですが、我慢して食べたそうです。そしてなるべくカロリーを消費させようと一所懸命にジョギングをしたと言ってました。1週間ぐらいならなんとかそれで済ませられるんですが、2週間とか3週間になると、さすがに無理です。そんな風になった段階で、初めて「意思表示」をすることになるんですね。

こんな風に相手にたいして申し訳ないという気持ちから、「ノー」のサインは非常に出しにくいんです。普段、日本で生活していてもハッキリと「ノー」と言うのは難しいですから、カナダのホームステイでは尚更のことだと思います。

### (3) ピーマン、大好き！

姉妹都市のホームステイで起きたことではないのですが、先ほど述べたブロック大学夏期研修のホームステイ先での出来事なので、お話しておきたいと思います。これも異文化理解論のホームステイに関する授業で学生から報告されたことです。ホームステイ先で、「好きな野菜は何？」と尋ねられて、「ピーマン」と答えたんです。もちろん、ピーマンは英語では「グリーン・ペッパー」と言いますから、そういう風に言ったんですね。そして、どうなったと思いますか？ ピーマンが食卓に出てきたのは良いのですが、今日もピーマン、明日もピーマン、その次の日もピーマン、ということで、毎日がピーマンになったんですね。もうこうなると、顔が緑色になるんじゃないかと、もちろん冗談ですが、そんな具合になった訳です。自分の意思を表現することが大事だと英語の授業で習い、「ピーマンが大好き」と言ったのは良いんですね。ところが、二日、三日と毎日がピーマンになったんです。日本であれば、二日、三日と同じものがでるのは考えられないですよ。恐らくこの場合は、カナダのホストマザーが特別だったのかも知れませんが、何しろこちらの意思表示がないのですから、相手にとっては“*No problem.*”となっても無理はありません。いずれにせよ、「他のモノを食べたい」と言えば問題は解決なんです。なかなかこれが言えないんです。相手にたいして要求するということ、これが言えないんで

すね。そして限界までいって、「もうギブアップ」という状態になって初めて意思表示をするということが多いんです。

以上見てきたように、「思いを言葉で表す」ということが、日本人にとっては難しいようです。全て、これと関連しているのですが、相手にリクエストをすることも、自分の思いを言葉にして相手に依頼する訳ですから簡単ではありません。まして、「みんなが知っていることを質問をする」ことは「恥ずかしい」ことだという意識があるので、これも容易なことではありません。このような状態ですから、相手の働きかけにたいして「ノー」と言うことは、ほんとうに困難なことなのだと思います。

### III ジャパニーズ・ウェイを越えて

知らず知らずのうちに身についたジャパニーズ・ウェイを越えてコミュニケーションをするということは、既にお話しましたように、日本人にとっては容易いことではありません。しかし、そのようなケースが皆無という訳ではありません。次に、そのような事例を見ていきたいと思います。

#### 1 「ハワイが、目的だろう」

これは、鹿追町の訪問団がストーニープレインを訪れた時のことです。商工会議所関係の代表として訪問団に参加した方が、ホストファミリーの家に案内されて居間のソファでコーヒーを飲んでいる時のことです。何と、いきなり、「ここに来た本当の目的はハワイだろう」と言われたのです。先に進む前に、なぜこのような発言がされたのかについて、多少説明が必要かと思います。一般的に言って、日本側からカナダに行く場合には、行政から何らかの財政的補助がでることが普通です。ところが、カナダ側から日本に来る場合には、行政による補助は普通はありません。町の議員さんについてもそうですし、中学生や高校生の場合にも大体がアルバイトをして自費でやってくるのです。このような背景を、このカナダ人のホストファ

ミリーの方は知っていて、さらに旅行日程の最後にはハワイに寄るということが書かれていたので、先のような発言になったのです。さて、その発言に続けて、「ハワイは良い所だ。オレたちも冬の間にハワイに行くことがあるが、ハワイはパラダイスだ」と言うわけです<sup>29</sup>。

いかがでしょうか、こんなことを言われると、どんな対応をしますか？普通は悔しいけれど、何も言えずに帰ってくるということが多いのではないのでしょうか。しかし、この日本人の方の場合は違っていたんですね。「先生、ほんとに悔しかったんですよ。ボクは英語ができないけど、必死になって言ってやったんです。ここに来たのは、2×6のカナディアン・ホームやログハウスを見たいからだって、と言ってやりましたよ。」という訳です。さて、それで、どうなったと思いますか。何と、翌日には、あっちこっちにカナディアン・ハウスを見に、車で連れて行ってくれたんです<sup>30</sup>。話はこれで終わりじゃないんですね。その後、日本に帰ってから手紙のやりとりが続いたんです。そして、数年後にはその方の息子さんが、何とストーニーブレインに留学したということです。なかなか、この方のように言える訳ではありませんが、何も言わなかったとしたら、それこそ悔しい思いをしながら帰ってきてたと思いますね。それが、その場で即座に言い返したからこそ、全く考えもしなかったような結果をもたらしたということです。非常に参考になる話だと思います。

## 2 シャワーを修理してあげる

道北のある都市の国際交流員をされていた方のケースについて、ご紹介いたします。私がお会いした時には市の嘱託として国際交流員をされていて、当時65歳前後だったと思います。この方が訪問団の一員としてカナダに行き、ホームステイ先で起きたできごとです。地下室でしたか、シャワーがあるのですが、壊れていたんですね。それを、何とこの方から

---

<sup>29</sup> 鹿追町での聴き取り調査、前掲。

<sup>30</sup> 同上。

言い出して、シャワーを直してあげたと言っていました。日本からカナダに訪問団として訪れ、ホームステイ先のシャワーを直してあげたという例は、おそらく他にはないのではないのでしょうか。非常に行動的な方と言いますか、こんな風に言っていました。「電気関係とか、機械関係は、大体が英語からきてますから、カタカナ英語で言えば通じますよ」と言うことでした<sup>31</sup>。

こんな風に言われますと、簡単なようなんですけど、実際はかなり難しいことだと思います。と言うのも、このケースから言えることは、やはり英語を正しく話そうとか、英語の発音がどうだとか言うのではなくて、相手に働きかけていこうとする態度と気構えがあるのかどうか、ということだと思います。なかなか出来ることではありませんが、そうすることにより、相手のホストファミリーの方から感謝されたことでしょうか。そして、まさに文化の壁を越えると言うのは、このようなことなのではないのでしょうか。さらに、この方の場合には、このこと以外にも、積極的に働きかけていて、文化を越える人間関係を築き、楽しいホームステイを送ったものと想像されます。

### 3 中学生、シャワーと対決

カナダでのホームステイと言っても、色んな国から移民としてやってきてカナダ人になった人たちも多い訳ですから、ホストファミリーの中には訛のある英語を話したりする人もいます。また一世は英語を話せない場合もあり、家族によってはみんなが英語を話せるという訳ではありません。これからお話するのは、守口市の男子中学生が中国系カナダ人の家庭にホームステイをしたときのケースです<sup>32</sup>。

---

<sup>31</sup> 名寄市での聴き取り調査、前掲。

<sup>32</sup> 財団法人守口国際交流協会での聴き取り調査：2005年9月21日。「姉妹都市派遣中学生報告書（3月22日-3月29日）」守口市国際交流協会、2001年、11ページ。

この中学生がシャワーを浴びようとするのですが、その時に家に居たのは全く英語が話せない“おばあちゃん”だけでした。おばあちゃんが話せるのは、中国語だけです。さて、みなさん方だったら、どうしますか。守口市の担当の方のお話では、この中学生は日本語でおばちゃんに話しかけて、シャワーを浴びることができたとのことでした。「シャワー出すの、どないしたらエエの？ 教えてくれへん？」とか、大阪弁で言ってるのが目に浮かびます。おばあさんには何のことか分かる訳ありませんが、当然のことながら中国語で応じたんですね。こんな風に、日本語と中国語でやりとりを続けていても問題が解決する訳ではありません。もう後は、インターナショナル・ランゲージしかありません。おばあさんの袖を引いて、シャワーの所までつれていけば、後はもう何をするのか、そんなに難しいことはありません。

このような行動ができるなら、この中学生はアマゾンのジャングルの中であっても、どこに行っても問題を解決していくことでしょう。思いを言葉や行動にして、目の前の問題を解決していこうという意気込みがあれば、コミュニケーションは可能だという良い例だと思います。ちなみに、守口市の担当者の方は、派遣の際の選考について、「中学生でいくら英語ができる言うても、たかがしれてますやん。ボクらは、元気でオモロイ奴を取ろうと言うてますねん」とのことでした。「勉強できる生徒よりも元気でオモロイ奴」を取ろうという守口市の選考方式が、確かにうまく機能していると言っても良いと思います。

これら三つの例から言えることは、もちろん生来の性格ということもあるのですが、目の前の問題を解決し、目の前の状況を変えていこうとする「相手に伝えようとする意思と気構え」が鍵になっていると思われる。なかなか普通は難しいかも知れませんが、そこに文化を越えて全く新しい関係を築きあげるヒントがあるのではないのでしょうか。

#### IV カナディアン・ウェイから学ぶ

カナダ人の家庭に入り一緒に生活すると、日本とは異なるさまざまな点が目に入ってきます。日本では見られない、客の迎え方、人の目を気にしない合理的行動、夫婦関係、家族の間の人間関係などです。一つひとつが学ぶべき点を含んでおり、カナダ人の生き方に会って自分たちの生き方を考えることになるようです。

##### 1 「費用は少なく真心は多めに」

日本の訪問団がカナダの姉妹都市を訪れると、カナダ側は Welcome party をして迎えてくれます。これがまた日本的歓迎方式とは随分と異なっているので、ビックリしたり考えさせられたりするようです。と言うのも、日本での歓迎パーティはホテルなどで行うことが普通ですが、カナダでは公共施設で行い、料理も持ち寄り形式が一般的です。友好協会の会長さんのお宅で歓迎会が行われることもあり、椅子まで持ち寄る場合もあります。日本ではホテル形式が「当たり前」であり、それが一つの基準となっている訳で、そうするとカナダの歓迎パーティはほんとうに衝撃的なんですね。

日本のように豪華な歓迎会ではありませんから、最初は、「ええ、これで良いの？」という思いを抱く人もいるようです。しかし、道東のある町の訪問団に参加した女性は今までに経験したこともないカナダの歓迎方式に出会い、「費用は少なめに、真心は多めに」という言葉で現しています<sup>33</sup>。まさに、その通りで核心をついた言葉だと思います。一般的にカナダ側では、姉妹都市活動に関して行政による補助はありませんし、姉妹都市の活動自体が「姉妹都市友好協会」などの民間のボランティア組織で行われるので、財政的にも日本のようにホテルでの豪華な歓迎会はできないと言っ

---

<sup>33</sup> 『第2回鹿追町北方圏視察研修報告』、1984年、45ページ。



た事情があります。そんな訳で、各自が料理を持ち寄り飾り付けなどにも工夫をしたパーティとなるのです。豪華ではありませんが、心から歓迎している様子が伝わってくるんですね<sup>34</sup>。

このように日本では想像もしない方式は、実際にその場に居合わせて体験しないと、なかなか理解できないかも知れません。仮に理解できたとしても、姉妹都市担当者が従来の方式を変えてカナダ方式にすることは難しいかも知れません。しかし、自治体の首長自身がカナダ方式に納得すれば、物事は動くと思います。たまたま、このような Welcome party に出くわした道東の市長さんの話ですが、「なるほど、日本でもできないかな？」とのことでした。ちかごろでは、日本でも姉妹都市にかける財源が縮小しているのが現状ですから、自治体の首長自らがカナダでの体験をもとにイニシアチブをとれば、大いに可能性があることだと思います。

## 2 「ママさんのヘヤースタイル、褒めてあげて」

日本の訪問団がカナダを訪れる場合、中学生や高校生はカナダ人の家庭でホームステイをするのが普通です。しかし、大人の場合にはホームステイはせずにホテルに泊まる場合も結構あります。ホームステイは煩わしいし、英語ができないから、というのがその理由かも知れません。しかし、カナダ人の家庭に入ると、外からでは窺い知れないカナダ文化を知ることができ、カナダ人の行動様式を間近に体験することになります。

例えば、これからお話しするのは、ある年配の男性のケースです。ホストファミリーのご主人から、「歓迎会パーティのためにママさんが美容院に行ってきたので、褒めてあげて」と言われたのです。さてさて、日本では宿泊しているお宅のご主人から「家内が美容院に行って髪をセットしてきたので褒めてやってくださいね」などと頼まれることは、あり得ないことです。全く想像もしなかったことですから、一瞬、戸惑ったのも無理はあ

---

<sup>34</sup> 保護者が持ち寄り形式で歓迎パーティを開くなどの影響が見られる。世田谷区役所生活文化部国際課での聴き取り調査：2004年6月21日。

りません。それで、何しろ生まれて初めてのことでですから、心臓をドキドキさせながら、「ユアー、ヘア、ビューティフル」と言ったとのことでした。もちろん、奥さんは“Thank you very much.”と言い、旦那さんも大喜びです<sup>35</sup>。

ホームステイをしなかったら、まさかこんな風に他人の奥さんの髪型を褒めるという経験をしなかったことでしょうね。それに、何よりも「夫婦の間でも、言葉にだして褒め合う」という、それまでに経験したこともない、カナダ人の表現様式を知り実践したことの意義は大きいのではないのでしょうか。思っている言葉にしない文化と、思っていることは言葉にする文化のギャップ、そのギャップに橋をかける試みだと言ってよいと思います。

### 3 ホストマザーが赤いガウン

さて、先ほどは訪問団の男性が出会ったカナダ文化について触れました。大人の訪問団の場合には、さまざまな職業や立場の方が含まれますから、それぞれの視点でカナダ文化を観察することになります。ここではある主婦の方が遭遇したホームステイでの出来事についてお話いたします<sup>36</sup>。

この主婦の方が驚いたのは、ホストマザーが夜になって「目も覚めるようなエンジ色のガウン」を着ているということでした。もちろん、このようなことはカナダ人の家庭に滞在しないと分からないことです。そして、これをどのように解釈するかは、見る人によって異なると思います。中学生であれば、目には入るけれども、特に考えることもなかったことでしょう。ところが、この女性の方は40歳代だったと思いますが、家庭の中の「主婦の目」で見ているのです。そして、次のような感想を抱いたのです。「仕事を持っていて、いくら忙しくても、女性としての身だしなみを忘れて

---

<sup>35</sup> 鹿追町『第2回鹿追町北方圏視察研修報告書』1984年、64-65ページ。

<sup>36</sup> 同上。

いないんだ」と<sup>37</sup>。

非常に衝撃的だったようです。それもそのはず、このホストマザーは、何と10人の子供を育て上げ、商工会議所の会長を務め、さらに市議員もされている方なんです。そんな多忙な人が、日本の姉妹都市からやってきたお客さんのホストファミリーを引き受けている訳なんです。日本では、そのような状態でホストファミリーを引き受けるということはありません。まして、髪を振り乱して毎日を送っているのが普通かも知れません。さらに、日本では子供ができてしまうと、「夫婦関係」が「お父さんとお母さんとの関係」になってしまうのが一般的ですから、その意味でもカナダの夫婦関係に新鮮な驚きを感じた訳ですね。そして、日本に帰ってきてからは、「夫婦二人で外食したりすることも心がけるようになりました」と、話してくれました<sup>38</sup>。

#### 4 “Value for money”

カナダでホームステイをすると、1週間や10日といった短い期間でも一度や二度は家族一緒に外食をする機会があります。そんな時に経験するのが、食べ残した料理は「ドギーバッグ」に入れてもらって、持ち帰るということ<sup>39</sup>。普通、日本では残った食べ物を持ち帰るということはしないので、このような光景も非常に衝撃的です。さらに、もっとビックリする情景に出くわす人もいます。ある方は、「イヤー、ほんとにビックリしました。お皿に残った料理だけじゃなくって、スープも容器に入れてもらって持ち帰ってるんですよ」と話してくれました<sup>40</sup>。

このドギーバッグに入れて持ち帰るということは、日本語で言う「もったいない」という側面もあるとは思いますが、むしろ「カナダ的合理主義」

---

<sup>37</sup> 鹿追町での聴き取り調査、前掲。

<sup>38</sup> 同上。

<sup>39</sup> 江東区第三大島小学校での聴き取り調査、前掲。

<sup>40</sup> 同上。

と解釈の方が適切だと思います。カナダでは“Value for money.”という言葉をよく使いますが、自分が支払ったお金に見合う対価を得ようとする考え方が、そこには存在しているものと考えられるからです。

日本には「もったいない」という考え方がありますが、カナダ社会で見られるように、ドギーバッグを要求することは、実際的には難しいのではないのでしょうか。常に「他人の目の存在を意識する」ために心理的抵抗が大きいと思います。いかに合理的とは言え、「誰もやっていないことだし、他人と違ったことをするのは恥ずかしい」という気持ち、そして「何もそこまでケチなことをしなくても」という感じになるのではないのでしょうか。常に他人の目を気にする社会と、他人の目を気にせず自分で決めて行動する社会の違いが表れており、非常に面白いと思います。

## 5 普段の生活の中に

日本では家にお客を迎えるとなると大騒動です。海外からの客人をホームステイさせるとなると、尚更のことです。ところが、このホームステイを引き受けるという点でも、カナダ方式は日本とは非常に違ってきます。一言で言えば、お客が来たからと言って自分たちの生活を変えるのではなく、普段の生活の中にお客を迎えるということだと言ってよいでしょう<sup>41</sup>。

この「普段の生活の中にお客を迎える」ということについて、2～3例をあげて説明いたします。例えば、日本からカナダに行った場合、出迎える時には不在なので別の家族が迎えにいたり、最後の日には旅行にでかけるので、他のホストファミリー宅に預けられるといったこともあります<sup>42</sup>。またホストファミリーも多様で、共働き家庭やシングルマザーやシングルファーザーの家庭は普通です。年金生活者の家庭や、時には80代や90代

---

<sup>41</sup> 財団法人守口国際交流協会での聴き取り調査：2005年9月21日。

<sup>42</sup> 井上真蔵「転換期にたつ姉妹都市交流」『北海学園大学学園論集』（第141号）北海学園大学、21ページ。

のおばあちゃんがホストファミリーになる場合もあるのです<sup>43</sup>。日本の基準では考えられないことです。日本では、シングルマザーの家庭や共働き家庭がホストファミリーになると言うこと自体、難しいのではないのでしょうか。例えば、シングルマザーの家庭でステイした場合のことを、ちょっと見てみましょう。ある男子中学生がホームステイしたのは、盲学校の教師をしているシングルマザーの家庭でした。毎朝一番に起き、朝の食事をつくり、毎日学校まで車で送っていきます。日本の基準からすれば大変なことですよ。そこにホームステイした中学生は、どのように感じたのでしょうか。「ボクが増えてしまって大変じゃないのだろうか」と心配しながらも、ホストマザーは毎日「明るい笑顔」で過ごしていたと感心しているんです<sup>44</sup>。学校に行く時には送っていきますが、下校時は都合がつかないのでスクールバスや知り合いに送ってもらうなど、普段の生活の中で無理はせずにやっているんです<sup>45</sup>。

こんな風に加ダのホームステイを体験すると、「ホストファミリーは、あんな風にやれば良いんだ。そんなに難しく考えなくても良いんだ。」と感じるようになります。そして、カナダのホームステイを経験してきた中学生たちは、こんどはボクらが歓迎する番だと思えるようになるようです。

## 6 家族って何？

日本で生活していると、中学生や高校生が自分と家族との関係について特に気にすることも無いのではないのでしょうか。ところが、カナダでホー

---

<sup>43</sup> 井上真蔵「異文化接触としての姉妹都市交流——守口市とニューウエストミンスター市のケース」『人文論集』(第53号)、北海学園大学、2012年、28-29ページ。

<sup>44</sup> 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係」『人文論集』(第34号) 北海学園大学、2006年、47ページ。

<sup>45</sup> 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——江東区とサレー市のケースについて」『人文論集』(26・27合併号)、北海学園大学、2004年、87ページ。

ムステイをすると、今まで知っている日本の家族とは異なっており、自然と家族について考えるようになります<sup>46</sup>。

まず決定的に違うのは、父親が毎日家族と一緒に夕食を食べるということです。ある女子中学生は、こんな風に言っています。

私が一番うらやましかったのは4時半ごろにはDadが帰ってくることです。日本では朝早くに仕事に行き、夜遅くに帰宅することが多いため家族そろって夕食を食べることが減っています。でも、カナダでは毎日そろって夕食を食べました。日本でもいつかそうなるの良いと思います<sup>47</sup>。

カナダのホストファミリーと生活をしていると、何と言っても父親の存在が日本と異なっているということが、毎日の生活から明らかになります。日本では、父親が6時に帰宅できるというのはあり得ないことで、体調を崩した時ぐらいではないでしょうか。それに、中学生や高校生の場合には部活や塾の関係で、家族と一緒に夕食をとるということも困難になってきています。そのような日本からカナダに行くと、何と家族全員が毎日夕食を一緒にしている光景にでくわし、あまりの違いに驚きながら、家族ということについて考えるようになるのです。先ほど触れた中学生は、4時半ごろ帰ってくると述べていましたが、大体5時前には家路につくためにハイウェイが帰宅ラッシュになる所もあります。

さて、父親と一緒に夕食が終わると、そこからがまたまた驚きの連続です。夕食の後片付けが始まりますが、子供たちはもちろんのこと、父親も後片付けをしたり皿洗いをしたりするのです。子供が後片付けを手伝うと

---

<sup>46</sup> 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉妹都市関係」前掲、60-61ページ。

<sup>47</sup> 世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年3月、23ページ。

いうのも、日本では珍しくなったのではないのでしょうか。塾に行かないとならないし、「宿題があるから」と言えば、立派な理由になります。ところが、カナダでは家族全員参加です。日本ではお皿洗いなどしたことのない男子生徒も、自分だけが座ったままでいる訳にはいきません。そんな状況の中で、生まれて初めてお皿洗いという経験をして、家族について考えるようになる訳ですね<sup>48</sup>。

家族と共に過ごす時間は、カナダの方がはるかに長く、これも日本とは異なるところです。日本から行った生徒たちは、夕食の後に家族そろってビデオ見たりします<sup>49</sup>。また、週末に家族一緒に湖の畔にある別荘にでかけ、カヌーやボート遊びをします。別荘と言っても、洋画に出てくるような豪華なものではなく、普通に働けば所有できる程度のものであり、カナダ人の生活の一部だと言えるでしょう。

ともかく、日常生活、非日常生活を通して、カナダ人は日本人に比べて遥かに長い時間を家族と一緒に過ごしています。日本の生徒たちは、そんな家族と一緒に過ごして、家族のあり方を真剣に考えざるをえなくなるようです。

## V 変化する自己とその認識

異文化カナダと出会うことにより、日本とのさまざまな違いを認識することになり、日本的な物事の見方や行動の仕方が自然と影響を受けることになります。具体的にどのような影響を受けどのような変化を認識するのかについて、お話ししたいと思います。

---

<sup>48</sup> 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——牛久市とホワイトホース市のケースについて」『人文論集』（第31号）北海学園大学、2005年、85-86ページ。

<sup>49</sup> 世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年3月、20、23ページ。

## 1 「恥ずかしいなんて、言ってもらえない」

カナダ人は行動的だということについては既に触れた通りです。それは日常生活の中に組込まれていて、ホームステイをしている日本の生徒たちも、その行動的な側面に触れることになります。

### (1) 初めての体験——ヘタでも良いんだ！

街の中の普通の家庭でも、プールがあったりトランポリンがある所が少なくありません。ちょっと都市を離れた所では、サイクリング、魚釣り、乗馬、カヌー、水上スキー、アイススケート、ウォーターボードなどを日常的に楽しんでいるんですね。サイクリングなどでも本格的で、自転車を「一人で2台も持っている人もいる」と驚いています。日本では全くしたこともないスポーツも多く、ホストファミリーの子供たちは何をやっても上手で、日本の中学生にとっては驚きの連続です。そんな状況の中で、ある男子中学生は面白いことを言っています。「日本人の場合は好きでも恥ずかしくてできないと言ってしまうがちだが、ここでは個性がすべてはつきりしていた」と述べているんです<sup>50</sup>。最初は圧倒されて「たじろいでいる」んですが、そのうちに「他人と違って当然であり、自分のやり方でやって当然であり、周囲の目を機にする必要なんか全くない」ということが分かるんですね。そうすると、もう「恥ずかしい」なんて言う気持ちは無くなって、カナダ人と一緒に行動をするんですね<sup>51</sup>。

このようなことは、大都市トロントのような街の中でも、見ることができます。例えば、街の中にある公共のテニスコートなんかで観察していると面白いですよ。日本であれば、テニスを習い始めたばかりで、「試合をしよう」などということは、まずはありえないことでしょう。何しろ、サーブを返せないレベルなんですから、試合にはならないのです。日本人なら、

---

<sup>50</sup> 「1998年度牛久市交換青少年事業報告書」牛久姉妹都市委員会、1998年、14ページ。

<sup>51</sup> 井上真蔵「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——牛久市とホワイトホース市のケースについて」前掲、2005年、68-69ページ。



とても恥ずかしくって「試合」なんてことは、絶対に頭には浮かばないでしょう。でも、カナダ人は違います。他人の目を気にしませんし、実践的なんですね。「試合をやろう」と言うんです。

このように、日本人には「恥ずかしい」という気持ちがあるので、周りの人と同じことをしていれば気分的に楽なんですね。自ら行動しようという気にはならないのですね。例えば、さきほど述べたテニスの例のように、初心者が「試合をしよう」ということなどは「恥ずかしい」し、あり得ないことなのですね。ある程度上手にならないと試合なんかできないというのが日本の常識です。ところが、カナダではみんな違っていて好きなことをしている訳です。テニスの初心者でも試合をしようと言う訳ですからね。

### (2) もう身振り手振りでも、恥ずかしくはない

英語についても同じようなことが言えます。ある女子中学生の例が、そのことをよく示しています。ホストマザーが色々説明してくれるのですが、英語が分からないんですね。それでも、ホストマザーはジェスチャーも交えて一所懸命に伝えようとするんです。その女子生徒にとっては、英語を話す時にそんな風にジェスチャーを交えて話すなんてことは想像もしてなかったことなんです。考えてみれば、学校の英語の授業でも身振り手振りで必死になって伝えようなんてあり得ないことですし、英語は間違いなく話さないといけないという思いがあったんでしょうね。そして、そのような考え方を持っていた自分に気づくことになるのです。「ジェスチャーなんて恥ずかしくてやりたくないと思っていた私が、この時はジェスチャーがないとやっていけないとおもった」と言うのです。そして、そのことに「一歩成長したなと感じました」と言っているんです。こんな風に、自分を変って、明らかに成長したんだと、自ら認識しているんです<sup>52</sup>。

### (3) これまで真剣に向かいあったことがあるだろうか？

カナダの家庭内における対人関係も、そこでのコミュニケーションも、

---

<sup>52</sup> 江東区教育委員会「平成14年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書(第16回)」, 2002年11月, 24ページ。

日本の場合とは大きく異なっており、ホームステイをしているとその違いに否が応でも気づくことになります。そして、日本の家族関係を考え、これまで自分が家族とどのように関わってきたのかを考えざるをえなくなるようです。東京の江東区の中学生は、次のように述べています。

何かすると必ず Thank you と言ってくれるし、Thank you と言うと必ず You are welcome. と言ってくれる。自分は今まで、こんなに丁寧に人と接していなかった<sup>53</sup>。

家族の間であっても、新聞をとってくれたり、食卓で料理を回してくれたり、ともかく何かしてくれると、必ず“Thank you.”という言葉が聞かれ、それに対して、“You are welcome.”という言葉が聞かれるのです。日本の同じような場面を考えてみてください。親と子の間であっても、夫と妻の間であっても、兄弟同士の間であっても、食卓の醤油をとってくれたからと言って、いちいち「ありがとう」ということは極めて稀なことではないでしょうか。むしろ、いちいち「ありがとう」を言い、それに対して「どういたしまして」とか言うとかえって「ごちない」というか、不自然というか、「翻訳調」の感じがしませんか。ところが、カナダの家庭内では、例え、相手が親であっても、例え相手の子であっても、してくれたことに対しては、感謝の言葉を声にするということが普通に行われているのです。このような対人関係はそれまでに経験したこともないことから、非常に新鮮に感じると同時に、自分自身がどのように家族と接してきたのかということを必然的に考えることになる訳ですね。

## 2 衝撃的体験——自分の行動が目の前を変える

たとえ1週間にしろ2週間にしろ、カナダで異文化と接するということ

---

<sup>53</sup> 同上，5ページ。

は、青少年たちにとっては衝撃的とも言える体験なのですね。何よりも大きいのは、カナダにおける人と人との関係が日本の人と人との関係とは大きく異なっているということ、そしてそのような関係の中で自分自身の行動が目の前の状況を変えていくのだという感覚に出会うことではないでしょうか。具体例をとりあげて考えていきたいと思います。

### (1) 市役所での“O Canada!”

観光とか語学研修でカナダを訪れる場合、カナダの国歌を公的な場で歌うということはありませんが、カナダの姉妹都市を訪れる場合には割とよく起こることなんです。例えば、江東区の場合ですと30名ほどの中学生が訪問しますが、事前研修でカナダの国歌“O Canada!”を練習します。歌詞の意味を教わってから、音楽の先生に本格的な指導をしてもらいます。そして、姉妹都市サレーを訪問して、市役所の前で歌うのです。「オー、キャーナダー」と歌い出すと、聞いている職員の方々が一斉に立ち上がる訳なんです。もちろん生徒たちは、“O Canada!”を歌い始めるとカナダ人は立ち上がって聞くということは、事前の研修でも聞いていたので知っている訳です。しかし、実際に自分たちが歌ったカナダの国歌によって、目の前のカナダ人たちが一斉に立ち上がるということは、この時に初めて経験することなのです<sup>54</sup>。このように自分たちの行動自体が、目の前の状況を動かしていくという体験は、行動するという意味の重要性を全身でつかむことになるのです。そして、国歌を歌う時には立ち上がって敬意を払うという国際的なルールも知ることもなるという訳です。非常に得難い経験ですね。

### (2) ホテルにて

ただ今お話したように市役所でカナダの国歌を歌うということが、生徒たちにとっては大きな仕事でしたが、この中学生たちはさらに驚くべき体験をしているのです。それは、姉妹都市に向かう途中でバンクーバーの

---

<sup>54</sup> 江東区教育委員会「平成14年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書(第16回)」, 前掲, 26, 42ページ。

ホテルに泊まった時のことです。そのホテルのプールサイドを借りて、“O Canada!”の練習をしたんですね。そうすると、どうでしょうか。感動的な光景が展開するんですね。その時の模様を、引率の教員の方は次のように述べています。

期せずして大歓声と大拍手が湧き上がったのです。泳ぎながら聞き入る人、窓を開けて眺める宿泊客、ベランダに出て聞き惚れる向かい側のマンションの人々、そして一生懸命に歌う生徒たち……。それらのすべてが見渡せる位置にいた私には、まるで一幅の名画を見ているような光景でさえありました。ハーモニーといい、声量といい、そして歌う心といい、国内でも素晴らしかった合唱でしたが、現地へ来てこんなにも胸を打つものになるとは、生涯忘れられない感動のひとつでした<sup>55</sup>。

引率の教員の方の感動が伝わってきますね。生徒たちを見守ってきた教師としては、ほんとうに嬉しかったことと思います。そして、何よりも生徒たちにとっては、こんな経験は生まれて初めてのことでしょう。カナダのホテルで、カナダ人の聴衆を前に「カナダの国歌」を歌うことなんか想像できたでしょうか。そもそも、日本社会では、まずこんな風に公共の場で歌を披露するという機会はないのではないのでしょうか。そして、たとえ日本の公共の場で歌ったとしても、カナダの聴衆の場合のように感情を直接的に表すという反応は起こらなかったのではないのでしょうか。ところが、カナダの聴衆は生徒たちの行動に対してほんとうに直接的に応えるんですね。そして、生徒たちは自分たちの行為が目の中の聴衆を動かしたことを五感で知り、それが新たな自信となるんですね。

---

<sup>55</sup> 同上，7ページ。

### 3 「お母さん、ありがとう」

ちょっと考えてみてください。今の日本の社会の中で、わずか2週間余で、中学生が劇的に変化するということって、どんなことがあるでしょうか？ なかなか思い付かないかも知れませんね。これまで、異文化カナダに触れて生徒たちが影響を受け変化する模様について触れてきました。そんな中でも、2週間前に送り出した自分の子供が「ほんとうに変わったんだ」と分かる象徴的な例をとりあげてみたいと思います。

世田谷区はウィニペグと姉妹提携をしていますが、17日間のプログラムを終えて帰ってきた時のことです。30名余の生徒たちは、まず区役所に行って帰朝報告をします。ある中学2年生の男子生徒が、迎えにきていた母親と一緒にタクシーで帰る途中のことです。何と、その男の子は母親に向かって、「お母さん、ありがとう」と言ったのです<sup>56</sup>。いつもこの話をするときには、色んなことが浮かんできて、こんな風に涙声になってしまいます。みなさん方が、中学生2年の時のことを思い出してみてください。私もそうでしたが、特に男子の場合は中学2年から高校にかけて母親が話しかけてきても何も話さなくなります。応えるのが面倒くさいんですね。この男子生徒の場合も同じで、母親にたいしてはまともに応えなかったんだそうです。これが、日本では普通ですよ。ところが、カナダの家庭の中では、たとえ家族であっても言葉でのやりとりが当たり前のことです。そして、さきほども触れたように、「人とは真剣に向かい合う」というのが当たり前だという体験をするんですね。ですから、日本を離れる前には照れくさくてとても口に出すことができなかった言葉——「お母さん、ありがとう」ということを、母親の顔を見ながら言えるようになったのです。この変化はとてつもなく大きなものです。母親にとって、これほど嬉しいことはないでしょう。このエピソードを話して下さった担当の方も、「若い人たちがこんな風に大きく成長するのを見ることは本当に嬉しいことで

---

<sup>56</sup> 世田谷区役所生活文化部国際課での聴き取り調査：2004年6月21日。

す」と仰っていました<sup>57</sup>。

## VI ジャパニーズ・ウェイの制約と脱却

カナダのホームステイで体験するさまざまな事柄は、日本語と英語という言葉の違いだけではなく、その根底にある物事の考え方や表現の仕方の違いに関係するところが大きいと思います。日本人は当然のことながら、日本的な視点（これは日本文化と言っても良いし、日本的行動プログラムと言ってもよいと思いますが）、そのような視点で物事を見て、考え、行動します。そして、日本人同士がコミュニケーションをする場合には、お互い日本的プログラムを使っていますから、何の支障もなく意思疎通が行われます。ところが、相手がカナダ人の場合には日本のプログラムでは、既に見てきたように意思疎通が困難な場合もでてきますが、われわれにとっては、日本文化があまりにも当たり前すぎて、その特徴を自覚的に考えることは少ないと言ってよいでしょう。ここでは、簡単にその主な特徴をつかんでおきたいと思います。

### 1 日本人の3つの“s”

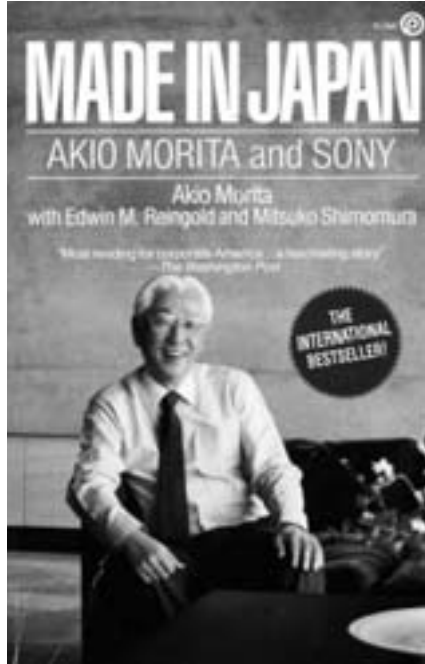
日本社会で生活していると、普通、周りは日本人です。そこでは、当然のことながら、日本的コミュニケーションがとられているのですね。つまり、日本人が意識せずに日本的思考、日本的表現、日本的行動をしているので、何が日本の特徴なのかを考えることはありませんし、普通はその必要もないわけです。

ところが、そのような日本的コミュニケーションは、日本人以外の人たちと混じりあう場では、その特徴が浮かび上がることになるのです。参加者の多くが非日本人である国際会議などでは、日本人は三つの“s”という

---

<sup>57</sup> 同上。

言葉で表現されたことがあります。一つ目の“s”は、smileの“s”です。いつも笑顔でいれば間違いないだろうということです。二つ目の“s”は、“silent”の“s”です。発言しないで黙っているということです。日本では、日本語であっても公の場で発言するということに慣れていませんから、日本人以外の聴衆に向かって英語で発言するということは簡単なことではありません。そして、三つ目の“s”は“sleeping”の“s”です。ニコニコしながら、発言することもなく座っていて、静かだなと思うと「眠っている」ということなんです



ね。日本では、会議の席なんかで、「目を閉じて」聞いている時もありますが、眠っている訳ではないのです。もっとも、眠っている人もいるかも知れませんが……。ところが、国際的な場では、普通、聴衆は話をしている人の方に顔を向けて聴いている訳ですから、目を閉じて「日本流」に聴いている姿は“sleeping”と解釈されても、無理はないのかも知れません。このような結果、1980年代にジャパン・バッシングが起きた時期には、日本人は「不可解(enigmatic)」だと言われたものです。残念なことですが、その当時、世界に向かって英語で日本の考え方を説明できるのは、ソニーの社長・盛田昭夫ぐらいしか居なかったのです<sup>58</sup>。

<sup>58</sup> 日本語版に先立ち、英語版は1986年に出版されている。*Made in Japan: Akio Morita and Sony*, New York, NY E. P. Dutton & Co, 1986.

## 2 言わなくても分かる — 日本的コミュニケーションの特徴

国際会議での日本人のコミュニケーションは、さきほど述べましたが、その特徴は何と言っても「言わなくても分かる」ということが根底にあるのだと思います。そして、この「言わなくても分かる」という考え方は、日本社会で生活していると「当たり前なこと」なので、特に意識することもないんです。ところが、これと対照的な北米の「言わなければ分からない」という社会に入ると、この二つの大きな違いを意識せざるを得なくなります。日本人学生が語学研修なんかでカナダに1~2週間も滞在すれば体験するんですね。カナダで1~2年住んでみても、「言わなくても分かる社会」からきた人間にとっては、「何でこんなことまで言わなくては分からないのだ」という気持ちを抱くことだと思います。そして、自分たちがいかに「言わなくても分かる」文化の影響を強くうけているということを認識することになるのです。

それでは、この「言わなくても分かる」文化とそこで行われるコミュニケーションについて、触れたいと思います。この「言わなくても分かる」ということは、日常生活の中でもよく見られることがらです。例えば、お客を招いて食卓に「刺身」がでてきて、お客が何かを探す素振りを見せれば、サツとお醤油を取ってあげるというようなことは、よく見かける光景だと思います。ここでは、そのようなコミュニケーションの中でも、極めて象徴的で高度に洗練された日本的コミュニケーションについて触れたいと思います。これは、究極的には「以心伝心」という言葉で現すことができますが、ここでは「最少限の言葉でのコミュニケーション」（極度に言葉を使わない）と理解したいと思います。さて、次の語句を見て、どのように感じますか？

・ 古池や、、、、

・ 月見れば、千々に物こそ、、、



「古池や、、、」と書かれています。たったこれだけで、何を伝えようとしているのかが分かりますね。もちろん、その後には「蛙飛び込む水の音」と続く訳ですが、言わなくても分かる訳です。こうして、芭蕉のメッセージが何百年の時を越えて、われわれに伝えられている訳です。それでは、その次のはいかがですか。「月見れば、千々に物こそ、、」と書かれています。これも、その後には「悲しけれ、我が身ひとつの秋にはあらねど」と続きますが、もう「月見れば」だけで全部が分かっけてしまいます。こうして千年以上もの時を越えて、古今和歌集のメッセージがわれわれの所に届く訳です。このように、十七文字、あるいは三十一文字という極めて限られた文字数でコミュニケーションが可能となるのは、驚くべきことだと思います。そして、さらに驚くべきことに、これは一部の知識人や富裕層だけに限られたものではありません。『百人一首』という手段により、千年以上もの時を越えて、場所を越えて、老若男女の別を問わず、社会的地位にも関係なく、多くの日本人の間で繰り返し繰り返し行われてきて現在も共有されている訳です。このようなコミュニケーション・スタイルは世界的に見ても極めて稀なものでしょう。

### 3 説明が苦手な国語辞典

これまでジャパニーズ・ウェイの特徴について述べてきましたが、日本語という言葉を使っている国語辞典にもその影響を見ることができます。言葉の意味を調べるために国語辞典を引くわけですが、もう十年も前のことになるとと思いますが、この国語辞典を日本語とコミュニケーションという視点から考えると非常に面白いことに気がつきました。全く当たり前のことなんです、この国語辞典の中の表現の仕方も、日本的思考の影響を大きく受けているんですね。

日本語に「一を聞いて、十を知る」という諺がありますが、まさにこのような思考が国語辞典にも当てはまっていると思います。「一を聞いて、十を知る」ということは、話し手（あるいは書き手）が「全体のほんの一部を言うだけ」で、聞き手は全体を理解するということが要求される訳なん

ですね。つまり、話し手は思っている内容を全部は言わないし言うのは不粹であるということです。そして、その内容を理解するのは、聞き手（あるいは読み手）の責任ということなんです。

具体的に見て行きましょう。例えば、いま「本」という言葉を考えてください。「本」を『広辞苑』で調べると、何と書かれていますか。「本」の箇所には、まず「書籍」、「書物」と書かれています。それでは、「書籍」と「書物」はどのように違うのでしょうか。中学生や高校生になると、「書籍」と「書物」は同じようなモノだけれど、全く同じモノではないということが感覚的に分かっていると思います。しかし、実際にどんな風に違っているのかは分からないし、辞書にもその違いが書かれていないんですね。それでは、新しくでてきた「書籍」を調べると、何と「書物」、「図書」と出てくるではありませんか。「図書」が新しく加わりましたが、また「書物」がでてきていますね。それでは、「書物」の正体は何なのかと思って、「書物」を調べてみます。何と、そこには「本」、「書籍」とでてきます。再び最初に調べた「本」に戻ってしまいました<sup>59</sup>。

本： 書籍。書物。  
 書籍： 書物。図書。  
 書物： 本。書籍。

<sup>59</sup>『広辞苑』の第4版（1991年）から「書物」の項に関しては、「文字や図画などを書き、または印刷して一冊に綴じたもの。本、書籍、図書、典籍。」と改められている。「本」と「書籍」については、第4版以降から最新版の第6版まで同じ記述のままである。第4版では、上記のように「文字や図画など……」の部分が加筆され、英英辞典の影響がうかがえる。しかし、「書物」の項だけが「英語的」になったものの、「本」と「書籍」の説明が「従来のまま」であり、不統一感が残る。おそらく、「書物」と「本、書籍」とは別の著者によるものであろう。また、日本で最大の国語辞典である『日本国語大辞典（第2版：12巻）』には、古典などから多数の用例が記載されているが、「本(book)」については、簡単に「書籍、書物」と書かれているのみである。

まとめてみると上のようになりますが、これでは、「本」が「どのようなモノ」なのかという「正体」は不明ですね。でも、日本人なら「何となく」分かりますね。小学生であれば分からないかも知れませんが、長年日本人をやっていると、何となく身についてくるんですね。例えば、「漫画の本」とか「本屋さん」とは言うけれど、「漫画の書籍」とか「書物屋さん」はあり得ないという風に何となく違いがあるのが分かりますね。こんな風に、国語辞典は物事の正体を定義するのではなくて、同じようなモノを並べて、「大体こんなモノですよ、分かるでしょ」と言っているんですね。「漫画の本」とか「本屋さん」とは言うけれど「漫画の書物」とか「書物屋さん」とは言わないというように、読み手の側が知識と経験を総動員して「本」の本質を理解しなければならぬのです。モノの本質を理解するのは「読み手」の責任、「聞き手」の責任ということなんですね。

それでは、英語の辞書の場合は、どうでしょうか。「本」と言えば、“book”ですね。それでは、book を英英辞典で調べたら、何とでているでしょうか。Oxford Children’s Dictionary<sup>60</sup>には、こんな風にかかれてあります。

**book noun (plural books) a set of sheets of paper fastened together inside a cover, for reading or writing on**

(Oxford Children’s Dictionary)

まず、“a set of sheets of paper”とありますから、これだけで「まとまった紙の束」が頭に浮かんできます。それで、どんな「紙の束」かというところ、`fastened together`とあります。これで「紙の束が、バラバラな状態ではなくて、まとめられている状態」だと分かります。そして、その次に“inside a cover”とでてきます。これで、「(まとめられた紙の束が)カバーに挟まれている」というのが分かります。そして、最後にその「まとめられた紙

<sup>60</sup> Oxford Children’s Dictionary, Oxford University Press, 2000.

の束」が、どのような役割を果たすためのものかということが書かれているのですが、“for reading or writing on”と書かれています。つまり、「読むためのモノ」であるし「書くためのモノ」でもある、となっています。なるほど、こんな風に何枚かの紙があつて、それがバラバラにならないようにまとめられていて、カバーに挟まれている。そして、それは「読むためのモノ」であり、「書くためのモノ」でもある、という風に、英語を追っていくと「目の前に」“book”が浮かんできませんか。英語では、こんな風に「書き手」が「言葉」でモノを定義しようとするのです。そして、それが読み手に理解されるかどうかは「書き手」の責任であり、「話し手」の責任であるのです。そして、お気づきのことと思いますが、英語では「まとまった紙の束」が「読むためのモノ」であると同時に「書くためのモノ」でもあると書かれています。つまり、日本語のいわゆる「帳面、ノート」と呼ばれるモノも、英語の“book”に含まれており、「本」と「book」は完全に同じものではないということが判ります。さて、先ほどの定義は、*Oxford Children's Dictionary* によるものですが、その内容は大学生が使う電子辞書の *Oxford Dictionary of English* と大きな違いはありません。敢えて子供用の辞書を取り上げましたが、ここから英米の子供たちは小さい時から、言葉で定義をするという文化を身につけているということを知ることができると思います。このように「言葉の意味」が理解できるかどうかは、英語では「書き手」の責任ということが伝わってくると思います。

こんな風に、文化の根底が根本的に異なっているということが理解されていけば、英語でコミュニケーションをするということが、単に英語を話すということに停まらないことが分かると思います。日本人同士であれば「話さなくても分かる」というコミュニケーション・スタイルが非常に効果的なのですが、英語でのコミュニケーションでは「言葉で相手を理解させる」という「意気込み」が必要だということです。文化的な特徴と違いを意識しても、なかなかその文化的な制約を越えるのは容易いことではないでしょうが、「話さなければ分からない」というコミュニケーション・スタイルを理解し身につけることが、われわれの重要な課題だと言えそうです。

## Ⅶ おわりに——ジャパニーズ・ウェイを越える試み

### 1 非ジャパニーズ・ウェイの確立

これまでお話してきたことは、姉妹都市交流という枠組みの中で、カナダという異文化に接して、普通の日本人がどのように感じどのように関わっていくのかということについてでした。そこでは、日本文化とは異なる表現様式や行動様式に出会い、戸惑いや違和感を感じたりするケースだけではなく、それまでに経験したこともない文化を越えるケースについても触れてきました。そこで重要なことは、自分たちの日本文化にいかに関与を受けているのかという認識 (prisoners of our own culture) と、同時に異文化との関わりにおいて、どうすれば「自文化」を越えることができるのかを考えることだと思います。既にお話したなかから、いくつかの重要なヒントをとりだしてみたいと思います。

まず、「思いを言葉に」するということが、全体を通して言えることでしょう。言ってみれば簡単なことのように思えますが、これは「言わなくてもわかる」スタイルとは異なる「言わなくてはわからない」コミュニケーション・スタイルを身につけるということです。ホストファミリーの奥さんが美容院で髪をセットしてきた時に、「ユアヘア、ビューティフル」と言葉にしてみるのには、日本文化の中で育ってきた者にとっては容易なことではありません。ただ単に、言葉にするというだけのことではないのです。自分の妻を(他人の前で)褒めるという行いは日本文化にはないのですから。ちょっと大袈裟な言い方をすると、自分の中の「文化的な価値観」を越えるということなのです。これは、理屈ではなく、良いか悪いか、好きか嫌いかなどの価値観の修正を伴います。そして、そのような「経験と訓練」によって身につくことなのです。プールサイドで泳ぎ手を観察するだけではなく、自ら水の中に入り泳いでみる必要があります。そして何よりもホームステイをするということの重要な点は、実践するにあたり「逃げ場のない状況下に自らを置く」ということではないでしょうか。そして、これは「真剣勝負のコミュニケーション」と関連してきます。日本の中で

このような状況を探することは難しいことです。授業中、先生に当てられても、黙っていると次の学生に回っていきます。カナダでのホームステイのように、「ジェスチャーは恥ずかしい」という意識を破って、相手とコミュニケーションをするということは必要ないのです。中学生や高校生になるまで日本で生活をしてきて、「辞書を引ながら必死になって」相手の言うことを理解しようとしたり、何とかして自分の思いを伝えようとしたことは、おそらく普通は経験することはないのではないのでしょうか。

このように必死になって一つ切り抜ける毎に、自信が生まれ、自分自身が変わるという体験をするのです。あのカナダ人の公衆の前で『オー、カナダ』を合唱し、自分たちのその行動が目の前の相手に伝わった時の感覚は、おそらくそれまで味わったことのない体感でしょう。そのようにして、自らの行動が目の前を動かすのだという感覚と、同時に自分自身が変わったという感覚を得るということが、何ものにも代え難い異文化との出会いがもたらす賜物だと言えるでしょう。

## 2 ジャパニーズ・ウェイを越えるヒント

これまでお話したことから、日本人にとって「思いを言葉にする」こと、「思いを行動にする」ことは容易ではありません。しかし、「ほんとうの目的はハワイだろう」というカナダ人の誤解を解いたり、壊れているシャワーを修理してあげたり、公衆の前で合唱し思いを伝えた例もありました。これらの例は多くはないのですが、ここにジャパニーズ・ウェイを越えるヒントがあると思います。異文化を越えてコミュニケーションをするということは、言葉だけではなくて、音楽や書道や料理など、さまざまな方法があります。『もしもピアノが弾けたなら』という曲がありますが、ピアノを弾けるということは素晴らしいコミュニケーション・ツールです。コンサートで演奏するなどという硬いものではなくて、『さくらさくら』でも、ビートルズの『イエスタデー』でも、『オー・カナダ』でも、ほんとうに簡単な曲で良いのです。今お話して思いだすことは、ブロック大学の近くに「フォート・ジョージ」という砦があるのですが、そこのツアーに参加

した時のことです。15名ぐらいの参加者でしたが、イギリス軍の当時の軍服姿のガイドさんが、将軍の居間でフルートを吹いて「当時の軍人は教養も必要だった」ということを示してくれました。そして、「誰かピアノを弾けますか?」と尋ねたのです。すると日本人の20歳ぐらいの女性がサッと手をあげたのですね。ところが、「ちょっと弾いてくれませんか?」と言われると、モジモジとしたままで気まずい雰囲気が終わってしまったのです。『さくらさくら』の出だしの部分だけでも良かったんですね。そうそう、『オー・カナダ』なんかであれば、もう最高でしょう。誰も1曲全部を演奏することを期待している訳ではありませんから。「弾いてくれる?」と言われて、サッと応えられていれば、素晴らしいコミュニケーションになったと思います。なかなか日本人の場合には、自然に自分から応じていくということに慣れていないんですね。ですから、急に言われても無理なんです。常々から、そのような練習をしていることが、異文化と接する時には非常に重要になってくると感じた次第です。これは、上に触れた書道でも料理でも同じことだと思います。こんな風に自分自身を表現できるかどうか、文化を越える鍵になるのではないのでしょうか。

このようなお話をしながらも、私自身はピアノも弾けないし、フルートも吹くこともできません。私のように特に何もできないといった場合にも、このようなハガキの大きさぐらいのノートなのですが、これならいつもポケットに入れておくことができます。初対面で英語で名前を言われても、なかなか聞き取れないことが多いのですが、そんな時にこのノートに書いてもらうんですね。そうすると、口で言うとは瞬で済むことが、書くという作業が加わって時間もかかりますから、相手の字を見ながら文字を確かめたりして、気持ちにも余裕がでできます。それで、相手が特に日本のことに興味があるのが分かると、簡単な漢字を書いてあげるんです。漢字は「形」から意味が分かりますから、結構カナダ人の方も興味があるんですね。例えば、「木」と書いて、“one tree” というと、すぐに分かりますね。そして次に、「木」と「木」を二つ並べて「林」と書いて“two trees” で “a wood” というと、これも納得します。それで次に、この「林」の上

にもう一つ「木」を加えて「森」と書き“three trees”で“a forest”と言うと、これも一目で納得です。

木  
a tree

林  
a wood

木  
木  
a forest

林  
林  
a jungle

さらに、この「森」の上に「木」をもう一本加えて、“How about this one?”と聞きます。そして、これは“a jungle”と言います。もちろん、そんな字はありませんから、「これは、冗談ですよ」と言ってあげないと本気にしますから注意が必要です。しかし、ここまでいくと、後は向こうからさらに「木」を加えて、“rainforest”「熱帯雨林」とかいう言葉もでてきて、大笑いです。これで、もう相手との距離がグーンと近くなるのは間違いありません。私どもの学生も、それぞれ自分にあったやり方で、文化を越えていてもらいたいと祈っております。

これをもちまして私の最終講義は終わらせていただきます。  
ご清聴、どうもありがとうございました。

### 聴き取り調査

- ・板橋区役所政策経営部国際交流課にて：2002年11月10日。
- ・江東区立第三大島小学校にて：2002年12月10日。
- ・財団法人守口国際交流協会にて：2005年9月21日～22日。
- ・鹿追町役場にて：1987年11月2日。
- ・世田谷区役所生活文化部国際課にて：2004年6月21日。
- ・名寄市役所にて：1987年12月2日。
- ・箱根町役場にて：2003年3月4日。
- ・リンゼイ市役所にて：1994年8月16日。



## 資 料

- ・「1998年度牛久市交換青少年事業報告書」牛久姉妹都市委員会，1998年。
- ・『絆8000キロを越えて——昭和61年度町民海外研修報告書，陸別町・ラコーム町姉妹都市提携の概要』陸別町役場，1986年。
- ・江東区教育委員会『平成14年度江東区立中学校生徒海外短期留学報告書(第16回)』2002年11月。
- ・鹿追町『第2回鹿追町北方圏視察研修報告書』1984年。
- ・「姉妹都市派遣中学生報告書(3月22日-3月29日)」財団法人守口市国際交流協会，2001年。
- ・「姉妹都市派遣中学生報告書(3月25日-4月1日)」財団法人守口市国際交流協会，2004年。
- ・世田谷区役所生活文化部文化・国際課『第17回ウィニペグ市派遣世田谷区中学生親善訪問団報告書』2004年3月。

## 参 考 文 献

- ・石井良一(編)「NRIパブリックマネージメントレビュー」野村総研，2006年11月(Vol.40)，(<http://www.nri.co.jp/opinion/region/2006/pdf/ck20061101.pdf>)。
- ・井上真蔵「異文化接触としての姉妹都市交流——日本とカナダの事例から考える」『開発論集』(第84号)，北海学園大学開発研究所，2009年。
- ・———「異文化接触としての姉妹都市交流——守口市とニューウエストミンスター市のケース」『人文論集』(第53号)，北海学園大学，2012年。
- ・———「カナダとの姉妹都市関係——何を学ぶか——」北海学園大学国際会議場，日課修好75周年・日本カナダ学会及び北海道カナダ協会創立25周年記念事業，在日カナダ大使館，日本カナダ学会・北海道カナダ協会・札幌国際プラザ主催，2004年8月21日。北海道カナダ協会会報第71号，北海道カナダ協会，2004年10月31日。
- ・———「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——牛久市とホワイトホース市のケースについて」『人文論集』(第31号)北海学園大学，2005年。
- ・———「カナダとの姉妹都市関係の特徴とその影響——江東区とサレー市のケースについて」『人文論集』(26・27合併号)，北海学園大学，2004年。
- ・———「カナダとの姉妹都市関係の分析——世田谷区とウィニペグ市の姉

- 妹都市関係』『人文論集』（第34号）北海学園大学，2006年。
- ——— 「国際化の一側面北海道とカナダとの姉妹都市関係について」『北見大学論集』29号，北海学園北見大学，1993。
  - ——— 「転換期にたつ姉妹都市交流」『北海学園大学学園論集』（第141号）北海学園大学。
  - 楠本利夫 「姉妹都市交流の意義 — グローバル化の進展と姉妹都市 —」『国際文化研修 2013 夏』vol.80, (<http://www.jiam.jp/journal/pdf/v80/tabunka01.pdf>)。
  - Sister Cities International, *Peace Through People*, Butler Books, Louisville, KY, 2006.
  - *Oxford Children's Dictionary*, Oxford University Press, 2000.

### インターネット

- カナダとの姉妹提携数（カナダ大使館ホームページ）
  - [http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/bilateral\\_relations\\_bilaterales/sistercity-jumelage.aspx?lang=jpn](http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/bilateral_relations_bilaterales/sistercity-jumelage.aspx?lang=jpn)
- カナダとの姉妹都市提携数（自治体国際化協会ホームページ）
  - <http://www.clair.or.jp/cgi-bin/simai/j/05.cgi>
- クロッカーズ（板橋区文化・国際交流財団交流課のホームページ）
  - [http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c\\_kurashi/005/005741.html](http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/005/005741.html)
- トルードー首相
  - <http://www.fredchartrand.com/Editorial/Trudeau/i-4dBVv7T>
  - <http://www.ctvnews.ca/historians-weigh-trudeau-s-legacy-decade-after-death-1.556809>
  - <http://sharpmagazine.com/style/pierre-trudeau-the-sharp-man-of-style/>